インターネット版「神戸大学震災犠牲者追悼手記」の制作にあたって

神戸大学ニュースネット委員会*

インターネットにも追悼手記を掲示しよう。急遽そう決まったのは、学内紙『神戸大学ニュースネット』の「震災一年特集号」発行直後の、今年１月下旬でした。インターネットのホームページ花盛りとはいえ、追悼手記などは、ほかに見あたらない。このメディアにあうものかどうかも不安でした。でも、いつでも閲覧できるし、随時訂正も可能。なにより、膨大な印刷コストが不要ということで、２月中に、ホームページの作成をすませ、すでに開設工事中だった関西学生報道連盟のホームページに掲示することになりました。

その後、やはり神戸大学のホームページにも掲載したい、という声が部内であり、追悼手記を大学ホームページにも掲載させていただこうということになったのです。

そもそも、学内紙『神戸大学ニュースネット』の「震災一年特集号」の準備は、昨年９５年の１１月から始まりました。震災直後から追悼特集を組みたいという希望が編集部にはあったのですが、延び延びになっていたのです。しかし、震災から一年というタイミングを逃すと、チャンスはもうないのではないか、ということで、『神戸大学ニュースネット』１１月号の社告で『追悼の原稿募集』を打ったのです。

ところが、その直後に、アメリカンフットボール部の１部昇格なるか、ラクロスが全日本に出場決まる、という大ニュースが発生。試合結果を、「壁貼り特報」や「手配り号外」で速報するのに、連日、編集部は追われることになりました。

結局、「震災一年特集号」の準備にとりかかったのは、１２月中旬。とにかく震災で亡くなった学生、教職員４４人のご家族に、手記を書いていただけないか、依頼状を発送することから始めました。

しかし、ここで障壁にぶつかりました。プライバシー保護のため、ご家族の住所は教えられないという学部がいくつかでてきたのです。そこで、依頼状を詰めた封筒を学部事務に手渡し、宛名を書いて発送してもらうという方法をとりました。その後十日ほどのあいだに、私たちの取材から、ご家族全員の住所はつかめたのですが、のっけから、編集作業が遅れることになったのです。

次の難関は、すべてのご家族から、追悼手記をいただけるかということでした。なんとしても、全員の追悼手記を載せたい。そんな編集部の気持ちとは裏腹に、締め切りの１２月２５日になっても、三分の一しか返事は届きませんでした。そこで、あとは、電話取材でコメントをいただくということになったのです。大晦日にかけて、連日のように、亡くなった方々のご家族にお電話をさしあげるということになったのです。

*unnnews@tky.threewebnet.or.jp

ご返事は、さまざまでした。いちばん多かったのは、「追悼文を書こうと、何度ペンを取っても、書きたいことが多すぎて書けなかった」というものでした。「ちょうど去年の今頃は、正月休みで帰省していた。あれが、最後だった」というお話しや、「地震前夜に、電話で話をした。おやすみ、というところを、なぜか、あの子は、さよなら、と言ったんです」というエピソード。「なぜ、もっとしっかりした下宿を選ばなかったのか。親の私の責任です」と、自分を責めている親御さん。そんな話を、電話口で伺いながら、編集スタッフは、涙がとまらないこともしばしばでした。最終的に、そっとしておいてほしい、というご家族は、三家族。そのご家族も、プロフィールの掲載には応じていただき、４４人全員のお名前を掲載する見通しがたったのは、締め切りの直前の１月６日でした。

新聞発行には、記事と並んで、広告も必要です。いつもの『神戸大学ニュースネット』は、タブロイド４ページだてのところ、今回は、１４ページ建ての、一挙増ページということで、広告がなければ発行はおぼつきません。しかし、広告出稿の締め切りは、１月５日。年内に広告を取らなければいけないのに、すでに１２月２７日にまで、押し詰まっていたのです。そこで、東京在住の 先輩に依頼して、同窓会の名簿をたよりに企業にファックスを送るという綱渡りで、わずか二日ですべての広告枠をセースルしました。

面建ては、一面と最終面が、一般ニュース。二面から四面が「神戸大学ドキュメントこの一年」。五面から十三面が「追悼手記」という内容です。取材と平行して、年末から、正月６日頃までは、スタッフは、膨大な手記をひたすらワープロタイピング。６日は徹夜で割り付けレイアウト作業。そのあとは、連日貼り込み作業。さして、ようやく１０日に印刷入稿。１５日に、印刷があがって、１６日に仕分けと、関係者への郵送。そして、１７日朝に、阪急六甲で紙面手配り。ご家族からの、大切な手記や、証言。瓦礫のなかから掘り出した写真などを前に、「なんとしても１月１７日に発行するんだ」と、スタッフは相当気合いが入っていたとはいえ、正直言って、実質一ヶ月で紙面が発行できるとは思っても見ませんでした。とにもかくにも、本紙は無事発行にこぎつけたのです。

しかし、私たちは、さらに新しい事態に直面しました。マスコミ対応です。発行準備をしていた、昨年１１月には、早くも、日経夕刊で取り上げてもらったのですが、発行直後には、共同通信、毎日新聞、朝日新聞、神戸新聞がとりあげてくれたのです。共同の記事は、九州ブロック紙の西日本新聞、京都新聞、山梨日日新聞などに掲載され、朝日新聞は、西日本各地の紙面に掲載されました。

そして、今度はその紙面を読んだ人たちからの問い合わせ電話が、連日のようにかかってきたのです。九州、大阪、兵庫などから、３０件ほどの問い合わせがあり、そのほとんどは、「『神戸大学ニュースネット』の紙面を送ってほしい」「ぜひ追悼記を読みたい」という反応でした。

そこで、困ったことがおきました。部数が足りないのです。印刷した紙面は、手配り、関係者や、学内各部局への配布なとで、残部がほとんどないところへ、「送ってほしい」の電話です。やむをえず、コピーをとって実費をカンパしてもらうことでなんとか切り抜けたのです。

インターネットの話は、そんなとき、編集スタッフからでてきたのです。「学外の人からこれだけ反応があるんやったら、ホームページに載せてみてもいいんちゃうか」ということになっ

たのです。

考えてみたら、インターネットには、いろいろな利点があります。文章を載せることができるのはもちろん、写真も掲載できる。本紙でその後見つかった細かい訂正個所も、気がついた時点で随時改訂できる。そして、なによりも、膨大な印刷料金がいらないということです。

ちょうど、関西学生報道連盟のホームページの準備が進んでいたのです。本来は、加盟九大学が共同で編集して毎週発行しているファックス新聞を転載して、新鮮なニュースを随時掲載するページにしようという計画で進められていたのです。そのページの特集コーナーに追悼手記欄を掲載してもらうことになりました。おかげさまで、6月２５日現在で、このホームページあてに約4200件のアクセスがありました。3月１６日付の読売新聞のマルチメディア欄にも、「被災地の生の声を読むことができる」と紹介されました。平均して１日に40～50件のアクセスがあります。

神戸大学のホームページとの相互乗り入れが落ちついたところで、今度は、「神戸大学ドキュメントこの一年」を神大のホームページ上に掲載しようと考えています。

確かに、インターネットは日々の膨大な情報をすばやく掲載するのに適したメディアでしょう。しかし、多くの人に同時に閲覧してもらえるメディア。記録性のあるメディアとしても有効なのではないかと、わたしたち神戸大学ニュースネット委員会のスタッフは考えているのです。

インターネットを始めて、まだ半年の若輩者ばかりですが、神戸大学の情報をこれからもどんどん発信していきたいと思います。みなさんからの、叱咤激励をお待ちしています。

研究室情報、サークル情報、イベント情報など、大学に関する情報ならなんでもかまいません。お待ちしています。
神戸大学ニュースネット委員会　unnnews@tky.threewebnet.or.jp まで。

『神戸大学震災犠牲者４４人への追悼手記』は、
http://www.threeweb.ad.jp/~unnnews/　の関西学生報道連盟のホームページで見ることができます。近日中に、神戸大学のホームページでも見ていただけるように整備する予定です。
また、『ドキュメント神戸大学'95』は、神戸大学ホームページ上の「神戸大学学生活動」に、6月新設されたニュースネット委員会のページ http://www.kobe-u.ac.jp/~newsnet/sindoc_1.htm で読むことができます。

『神戸大学ニュースネット委員会』は、1995年4月に、神戸大学放送委員会のネットニュース部門が、放送委員会の勧告をうけて独立して創設された。6月に『硬式野球神京戦号外』を発行。10月に、定期刊を創刊。11月に『六甲祭特集』を2版だてで発行。号外『アメフット１部昇格ならず』を発行。12月に、号外『ラクロス全日本で準優勝』を発行。96年1月に『震災一年特集号』 発行。2月に『受験生特集号』を発行。4月に『新入生歓迎号』、5月には、壁はり特報『アメフット・レイバンズが西日本選手権で優勝』を発行。6月に、本紙第6号を発行。大学届け出団体（同好会）。